

浜田小学校 人権教育推進計画

1 本校の人権意識における現状と課題

本校では「知ること・気づくこと」に重点をおき、人権教育を進めてきた。その中でも、子どもを取り巻く家庭や社会に存在する差別の現実を捉え、教員同士で子どもの生活背景を通して語り合う場を設けたり、実践を共有したりすることを大切にしてきた。そして同時に、自らの人権感覚を磨き、カリキュラムづくりやなかまづくりにつなげてきた。子どもたちの発言や行動の奥にあるものに目を向け、子どもたちの生きづらさや困り感を大切にすることは今後も続けていきたい。

しかし、昨年度末の人権教育のふりかえりを行う中で、課題として三つのことが挙がってきた。

一つ目は、「決めつけ」があることだ。子どもたちの中には依然として無意識の決めつけ（アンコンシャス・バイアス）や偏見があり、そのことにも気づくことができていない現状があることが分かってきた。「自分は仲がいいから知っている」「私は、差別なんかしていない」と知ろうともせずに、自分のものさしでしか見ていない現状である。私たち教師も子どもたちの言動の一面だけを見て、決めつけていることがあるのではないかと思う。「知った気になっている」私たちと子どもたちがさまざまな人権感覚に触れて、「知ってよかった」「自分って全然知らなかったんだな」と感じるような経験を積んで、物事を多面的に捉えられるようにさせたい。そのためには、自分の思いを出すことができるようになることが大切である。何を言っても周りが受け止めてくれる、認めてくれるといった安心感のある集団を築いていき、思いが出せるように取り組んでいく。自分の本音を話すことができていない子どもたちが本音で語り合うことによって、**今まで知らなかったなかまの一面や考えをたくさん知ることができる経験を積み**せたい。「知ってよかったな」「知っていた気になっていたけど、自分って知らなかったんだ」と思える経験をたくさん積んでいき、自分から正しいことを知ろうという姿勢を培って、「決めつけ」に解消をしていく。

二つ目は「他人任せ」にすることだ。自分は、「このトラブルについて関係ない」「誰かがなんとかしてくれるだろう」と自分から行動しようとしなことが課題として多く挙げられた。自分の周りに起きている出来事であるのに、無関心であることが多く、自分さえよければいいと考えているのではないだろうか。それは、私教師自身が、子どもたちのトラブルに関わりすぎていることが影響しているのではないかと思う。トラブルを解決するのに、教師が介入すると素早く解決することができる。しかし、それは、子どもたち自身で解決できた達成感を得られるチャンスを奪っていることが影響している。日常の中から子どもたちを見取り、「自分事」と捉えられるような教材、アプローチが必要になってくる。また、私たち子どもにかかわる大人自身が「差別をなくす」当事者としての意識をもっていなくてはならない。教師自身が自分の行動、発言を振り返り、「差別をなくす」ということに向かっているのかどうかを見つめ直し、自分自身を変えようと意識し、行動につなげていく。教師自身が「他人任せ」にすることなく、子どもたちの行動・発言は自分の関わり方が影響しているのではないのかと「自分事」として考えることを進めていく。

三つ目は「行動力がない」ところだ。「周りにどう思われるのか分からない」「みんなと違うと怖い」などと、集団の中がいなければ安心できず、マジョリティ側につきたがるのが影響している。学習においても、周りが手を挙げた様子をうかがってから自分も手を上げる様子などから、自信がないことが分かる。子どもたちが周りの目を気にせず話すことでよかったと思える経験をさせたい。私自身、周りからど

のように思われるか分からない恐怖と間違った時の恥じらいから、行動することが難しかった。しかし、勇気をもって行動に移したときに、「よく話したね」「言いたいことがよく分かった」と行動してよかったな思える経験ができた。そこから、私自身、行動したいと思えるようになった。子どもたちにも行動してよかったなと思える経験を積んでいくことで、行動できる自分が好きとなり、行動力を伸ばしていきたい。

さらに、教員間には経験の差もある。教員どうし、日々の気になる人権に関するエピソードを交流し合い子どもへの見方考え方を多面的、多角的に捉える力を身に付けていき、子どもたちの状況や背景を理解して、課題をとらえ、ねらいをもって教材を活用し、子どもたちとともに成長できる力を学校全体でつけていく必要がある。

2 めざす姿

○めざす学校の姿

学ぶことが楽しい学校

○めざす子どもの姿（学校教育目標）

考える子・やさしい子・つよい子

- ①一人一人に、自分で考え、判断する力をつける。→考える子
- ②自分と仲間を大切にし、あいさつを通して人とつながり合える子どもを育てる。→やさしい子
- ③仲間とともに差別と向き合い、自分の生き方を見つめる実践力を育てる。→つよい子

【浜田小学校人権教育重点取り組み目標】

人権課題から学ぶ

- ① 「高め合う」・・・人権感覚を高め合う教職員集団のために、実践交流や語り合う研修を進めます。
- ② 「知る」・・・子どもの姿を多面的に捉え、人権課題に適した教材研究を進めます。

なかまづくり

- ③ 「つながる」・・・子どもたちが共同で学ぶ活動を進めます。
- ④ 「認め合う」・・・様々な活動を通して自尊感情を高める活動を進めます。

気づくこと・知ることから始まる

効果的な人権教育にするために

①教師の人権感覚の向上

- ・気になるエピソードを交流し、子どもの見方や考え方を多面的にとらえる力をつける
- ・人権座談会などで社会の中にある違和感に気づく力をつける

②差別をなくしたいという願いを持つ子、自分事として考える子の育成

- ・系統立てた人権カリキュラムの構築
- ・教材研究の推進

③なかまづくり

- ・グループ学習、共同学習の推進
- ・本音が出せる環境作り

現状の課題からめざす姿

決めつけ
自分のものさしでしか考えない
↓
様々な人権感覚に触れる
↓
知らなかったことに気づく
↓
知ってよかったと思える

他人任せ
無関心
↓
自分たちで解決しよう
↓
解決できてよかった

行動力
周りにどう思われるのかわからない
不安・恐怖・羞恥
↓
行動してみよう
↓
やってよかった
↓
もっとしてみよう!

推進計画

人権課題を通して学ぶ

研修会参加・実践交流
語り合う場の設定

↓
人権感覚を高め合える教職員集団

子どもたちの姿を多面的にとらえる
教材研究

↓
子どもたちの課題に合った教材

安心して学習ができる なかまづくり

共同学習
学び合う環境作り

↓
自分や相手のために行動する力の育成

自分の差別心に
気づくことができる

↓
自分から変わっていき
とする行動力

差別をなくそうとする自分がすき

よりよい社会を作る一員になる

今まで

これから

『部落問題学習ができる子どもたちの育成』

「差別をなくしていきたい」という願いを持つ子

自分事として考える子

※「自分事」

- ・「もしも自分だったら…」から「自分はどうだったのか？」へ
- ・「なくなってほしいです」→「なくしていきたいと思います」→「なくしていくためにできることは…」へ

(1) 人権教育目標

○人権教育の重点「自分事として考える、行動する」

(2) 各学年の目標

※別紙「2024 人権課題の系統性と学びのゴールについて」を参照

3 行動計画

(1) 子どもの現状を把握し、すべての子どもの人権が大切にされる仲間づくりをめざします

- ・子どもの行動の背景にあるものを捉え、より多角的に学級集団づくりについて検証できるようにつとめるとともに、一人一人に適切な指導ができるよう指導者が情報を共有する。
- ・自己肯定感を育て、子どもたちが互いの違いや個性を受け入れ、人の痛みを自分の痛みとして共感し、不合理を指摘し合い共に高まっていくことができる学級集団づくりを進める。
- ・授業づくりの中で互いに尊重し合える仲間を育てる。そのために、一人一人の子どもが「自分が大切にされている」と実感できる授業づくりを進める。
- ・視点となる児童をもとに学級集団の様子を振り返ることによって、課題を探り、解決のための手立てを考えて実践する。
- ・総合的な学習の時間や生活科、道徳、特別活動などの時間において、自分たちの身近な偏見や差別意識について考え、自分たちの生活を見つめさせる。
- ・部落問題学習ができる子どもたちを育てる。
- ・外国にルーツのある児童等を把握し、仲間づくりや学級指導にいかす。

(2) 授業づくりモデルをもとに人権を通して学び、部落問題学習を推進します

【授業づくりモデル】

- ① 目の前の子どもたちの課題となる姿から出発し、どんな力をつけたいのか
 - ・課題となる姿が、子どもの背景や人権課題とどう結びついているかを検証する
 - ・子どもたちの課題となる姿が変容していく視点を持つ
 - ・子どもたちが45分間学び続けられる課題を設定する（「ゆれ」や「気づき」がある課題）
- ② 何のために、何をするのか（≠知識を増やしていくこと）
 - ・その教材で絶対にはずさないことは何かを持つ（学ばせたいことは何か）
 - ・人権課題や教材について教師自身が学び直す（交流・点検し合う）
 - ・各学年の行事との関連で見直す（行事で取り組むことの精選、整理、関連・価値付け）
- ③ 活動を中心に計画する
 - ・人との出会いや体験⇒身近になる⇒忘れない、思い出す、新たにつながる
 - ・活動したこと、行動したことはよく覚えている⇒行動した自分が好きになる
 - ・集団として活動する⇒自分を出す場面が出てくる
 - ・「もしかしたら目の前に当事者がいるかもしれない」ということを常に考える
 - ・地域とのつながりという視点でも考えていく（地域教材の発掘）

④部落問題学習を見据えた系統性を持つ

- ・外国人の人権に加え、学年の系統性や子どもの実態に応じた人権課題を設定し、部落差別をなくすことにどうつながるかという視点を持って学習を積み上げる
- ・教師自身が部落問題と向き合い、部落問題学習に学ぶ

⑤事実を大切にす

- ・想像したことを根拠に進めるのではなく、子どもがつかんできた事実を根拠としていく（事実にこだわり、それを根拠にしようとする姿は、部落差別をなくす姿に通じる。事実ではないウワサや根拠のない情報に流されることは、自分でも気づかないうちに差別に加担してしまっていることになりかねない）→メディアリテラシー、情報教育の推進

⑥自分ごとにしていく（≠自分がその立場だったら =自分はどうなのか）

- ・おかしいことに腹が立つ（反差別の立場に立とうとする）
- ・相手の思いや考えを聴く（聴き合う）自分の思いや考えを語る（語り合う）
- ・自分を見つめ直す（自分をその問題から遠いところに置いていた自分に気づく）
- ・自分の生活にもどしていく（自分のために差別をなくそうと行動する）

(3) 学力保障・学び合う力の育成を推進します

- ・差別を見抜く力をつけるため、基礎的・基本的な知識・技能を明確にして、その定着を意識した授業づくりをする。
- ・「聴き合う関係」と「語り合う関係づくり」を大切にして、すべての子の学びを保障する。

(4) 地域の人々や保護者との連携を図ります

- ・年間1回は人権学習（総合的な学習の時間・生活科・道徳 など）を公開することで保護者・地域の方々とともに人権学習を深める機会とする。

(5) 教職員どうしが学び合い、自身の価値観・考え方を深めていきます

- ・教職員自身の人権意識や言動を見つめ直す。
- ・教職員どうしが語り合える関係を築き、人権感覚を高め合える集団をめざす。
- ・人権教育についての校内研修会や学習会をったり、各種の人権教育研修会に参加したりして、一人ひとりの人権意識を高める

4 なかまづくりについて

めざす姿

なかまづくりを進めるということは、集団の中でしんどい思いをして過ごしている子ども、集団から最も遠い位置にいる子どもが、周りの子の変容により、安心して、いきいきと生活できるようにしていくということである。それは同時に、どの子にとっても過ごしやすく、安心できる集団にしていくことにもなる。子どもたちがおかしいことはおかしいと言ったり、自分を見つめ直したりすることで、人とのつながりをつくり、自身の生き方を豊かにすることにもなる。

子どもたちはくらしの中にさまざまなしんどさを抱えている。そこには少なからず差別の現実がある。仲間づくりを進めていく上では、そのしんどさの背景には何があるのか、子どもどうしの関係や

家庭背景といった『子どもを取り巻く環境』について（教師が、子どもどうしが）聴くこと、語ることで明らかにしていくことが、まずは必要である。そのために、教師自身が自分の見方や取組について多様な視点から見つめ直したり、方向性を捉え直したりし続けていかなければならない。そして「この子」にどんな力をつけていきたいのかを明確にして、子どもと向き合い、子どもどうしをつなげていく。他にも、次に挙げる点を大切にする。

- なかまの問題を自分のこととして考える力を育てる。（自分はどうなのか）
- うわさや偏見などに惑わされない事実を見つめる力を育てる。
- 視点になる子に対する周りの子どもたちの見方を変える。
- 自己選択・自己決定できる関係づくりを行う。
- 教師どうしで話をし、自分の見方や価値観を問い直し続ける。
- 教師どうしで日頃から子どものことを話す。